

国分郷土史 年表

		飛鳥時代	古墳時代	原 始 時 代			
和銅 七六	和銅 七六	大宝 二	六世紀 ----- 四世紀	弥生時代 六千四百 年前 二千年前	縄文時代 九千年前	旧石器時代 二万五千年前 一万二千年前	年 号
							西 曆
七二四	七二三	七八二 七〇二					郷 土 の 動 き
日向国を分けて、大隅国ができる 豊前の民二〇〇戸が大隅国に移住する		薩摩国ができる 隼人が朝貢し、宮廷の庭で相撲をとる 隼人の朝貢、六年交替で続く	(城山山頂遺跡から、土師器・須恵器が多く出土する) (市内の低台地から成川式土器・石器類が出土する) (市内山手の台地から土器・石器類が出土する)	(鬼界カルデラ大噴火、アカホヤ層ができる) (国分高校敷地で住居跡見つけ、鏡の小片が出土する)	平杵遺跡 (国分市上井平岡より土器・石器・人骨が出土する) 上野原遺跡 (完全な平杵式土器や土偶類が出土する) 鬼界カルデラ大噴火、アカホヤ層ができる	始良カルデラ大噴火 大量のシラスが積もる 桜島大噴火 上場遺跡 (出水)	
七二〇	七〇一	六四五 七〇一	古墳時代 五九三	西 曆 後 前	縄文時代	旧石器時代	西 曆
都を平城京 (奈良) に移す		大宝律令ができる 大化の改新が始まる	聖徳太子、摂政となる 大和朝廷が国土を統一する 古墳が盛んに造られる	邪馬台国卑弥呼が魏に使いを送る 稲作が始まる・弥生式土器を使用	土器や石器を使用する 狩猟生活・縄文式土器を使う (県内各地で遺跡が発見される)	日本列島に人が住みはじめる	中 央 の 動 き

代時良奈	代時	時	安	平
養老四 天平二 天平一二 天平七 宝字八 天字七 神護三 景雲三 延暦七	七二〇 七三〇 七四〇 七六三 七六四 七六九 七八八	隼人の反乱(国守、陽侯史麻呂を殺害) 亀ノ甲遺跡? 大隅・薩摩両国、班田收授制実施できず 藤原広嗣の乱、隼人は両軍に分かれ戦う 中臣伊賀麻呂を大隅守に左遷する 大隅・薩摩の境で大噴火、鹿児島信爾村の沖に三島できる 和氣清麻呂、大隅国に配流される 曾乃峰(霧島)、大噴火し多くの沙石を降らす	延暦二〇 延暦一五 治安一 万寿三 寛治五 康治一 治承一	一一七二 一一七三 一一七四 一一七五 一一七六 一一七七 一一七八
七二〇 七二三 七四一	七二〇 七二三 七四一	隼人征討に大伴旅人を派遣する 三世一身の法が制定される 国分寺建立の詔がでる	延暦二〇 延暦一五 治安一 万寿三 寛治五 康治一 治承一	一一七二 一一七三 一一七四 一一七五 一一七六 一一七七 一一七八
七六六	七六六	道鏡、法王となる	延暦二〇 延暦一五 治安一 万寿三 寛治五 康治一 治承一	一一七二 一一七三 一一七四 一一七五 一一七六 一一七七 一一七八
七九四	七九四	都を平安京(京都)に移す	延暦二〇 延暦一五 治安一 万寿三 寛治五 康治一 治承一	一一七二 一一七三 一一七四 一一七五 一一七六 一一七七 一一七八
		藤原氏の勢い盛んになる 莊園が各地に広まる 藤原道長、摂政となる 白河上皇、院政を始める 平清盛、太政大臣になる 鹿ヶ谷事件おこる 平氏滅ぶ。頼朝、諸国に守護・地頭を置く	延暦二〇 延暦一五 治安一 万寿三 寛治五 康治一 治承一	一一七二 一一七三 一一七四 一一七五 一一七六 一一七七 一一七八

[illegible]

年号	西暦	郷土の動き
永禄四 元亀三 永禄九	一五六一 一五七二 一五六六	廻城の戦いで島津忠将が戦死する 肝付氏の舟師、大隅小村（広瀬）を攻める ――島津義久、薩・隅・日三州を征圧する
天正五 天正二 天正一五 文禄一 文禄三 文禄四 文禄二 慶長一 慶長四 慶長五 慶長七	一五七七 一五七四 一五八七 一五九二 一五九四 一五九五 一五九七 一五九九 一六〇〇 一六〇二	上井寛兼、日記を認める（天正一四年まで） 豊臣秀吉島津氏を討つ。義久は薩摩、義弘は大隅を安堵される 文禄の役、島津義弘出陣。義久三州の社寺領三分の一を徴する 薩・隅・日三国の太閤検地始まる 三州検地が終わる。義久、富隈城に移る 慶長の役、島津義弘が出陣する 伊集院忠真、庄内の乱をおこす 関ヶ原の戦い、島津義弘西軍に参加し敗れる 島津義久、堀切氏へ朱印状を与える。伊勢神社建立される
慶長九 慶長一〇 慶長一一 慶長一二 慶長一六 慶長一七 元和一 寛永九	一六〇四 一六〇五 一六〇六 一六〇七 一六一一 一六一二 一六一五 一六三二	舞鶴城築かれ、義久富隈城より新城に移る。金剛寺建立される 常念寺・龍昌寺建立される 服部宗重、たばこを国分の梅木で初めて栽培する 伊集院下野入道の碑建立、翌年山田越前入道の碑が建立される 義久、舞鶴城で死す。慶長内検（検地）が始まる 本田どんの隠し墓が造られる お上様への起請文。国分郷土、鹿兒島へ移動する 寛永内検が始まる
	西暦	中央の動き
	一五六八 一五七三 一五七五 一五八二 一五九二 一五九七 一六〇〇 一六〇三	織田信長が京都に入る 室町幕府滅ぶ 長篠の戦いで鉄砲が使われる 太閤検地が行われる 文禄の役がおこる 慶長の役がおこる 関ヶ原の戦いがおこる 徳川家康、江戸幕府を開く * 朱印船貿易
	一六一五	豊臣氏滅ぶ。武家諸法度できる

	代	時	戸	江	
年号	西暦	郷土の動き	西暦		中央の動き
宝暦一〇 明和五	一七六〇 一七六八	止上大権現が改築される 東敷塩田開かれる		天保二 天保一四 弘化二 弘化四 嘉永四 嘉永五 嘉永六 安政一	
天明三	一七八三	桜島噴火、干ばつ、風水害連年に及ぶ		一八三〇	
寛政一〇	一七九八	芭蕉句碑が建てられる		一八三〇	
				一八三一 一八四三 一八四五 一八四七 一八五一 一八五二 一八五三 一八五四	
				清水郷地頭飯屋ができる 『三国名勝図会』六〇巻が完成する 小村新田開発の工事が始まる 阿蘇鉄矢などによって、大穴持神社の石灯が造られる 松永用水取り入れ口完成。小村新田ほぼ完成する 「国分諸在萬しらべ帳」ができる 島津斉彬、山王社（日枝神社）に参詣する 向花村の検地が行われる	
				一八二五 一八三七	
				一八四一	
				一八五三	
					伊能忠敬、全国測量を開始し 文化四年に全国図完成する
					田沼意次、老中となる 天明の大飢饉、四年間つづく 寛政の改革が始まる
					異国船打払い令をだす 大塩平八郎の乱おこる。このころ百姓一揆・打ちこわし頻発する
					天保の改革はじまる
					ペリーが浦賀に来航し開国を迫る

明治時代						江戸時代	
明治一	明治二	明治四	明治五	明治六	明治八	安政五	文久一
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久二
一月、戊辰戦争に国分の各郷からも出陣。廃仏毀釈運動広がる。	六月、 ^{あづかい} 暖・與頭・横目を廃し、常備隊を置く。	七月、鹿兒島県を設置。十一月、国分は都城島囃子郡に属する。	都城島第十六郷校を設立（国分小学校の前身）翌年鹿兒島県第四十郷校とする。二月、常備隊廃止、小隊長を戸長に改める。	一月、都城、美々津県を廃し、鹿兒島県に大隅国を併合する。	各郷校は変則小学校として発足	島津斉彬、鹿兒島本城を国分へ移すことを検討させる。	文久三
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久四
三月、五ヶ条の誓文發布される。	三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	一月、徴兵令が發布される。	文久五
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久六
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久七
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久八
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久九
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久十
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久十一
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久十二
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久十三
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久十四
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久十五
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久十六
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久十七
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久十八
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久十九
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久二十
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久二十一
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久二十二
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久二十三
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久二十四
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久二十五
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久二十六
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久二十七
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久二十八
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久二十九
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久三十
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久三十一
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久三十二
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久三十三
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久三十四
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久三十五
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久三十六
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久三十七
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久三十八
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久三十九
一八六八	一八六九	一八七一	一八七二	一八七三	一八七五	一八五八	文久四十
三月、神仏分離令だされる。	一月、版籍奉還がおこなわれる。	七月、藩藩置県。	文部省が設置される。	八月、学制が頒布される。	十二月、太陽暦となる。	七月、地租改正令が發布される。	文久四十一

明		治		時		代		
明治三	明治二	明治一	明治一	明治一	明治一	明治一	明治一	年号
一八九〇	一八八九	一八八五	一八八六	一八八四	一八八三	一八八二	一八八〇	西暦
五月、地租改正に着手するが、一〇年の西南戦争のため中止する								郷土の動き
二月、西南戦争がおこり、国分地方も戦場となる								
一月、地租改正に再着手する								
四月、簡易小学校が開設される								
十二月、戸長選挙法が公布される								
二月、県会議員の選挙がおこなわれる								
六月、地租改正終了する。この春、コレラが発生し広がる								
六月、国分郵便局が開局する								
地租改正により地券を交付する								
大暴風雨で大被害でる。手籠川、大洪水で石橋が流出する								
人民公選の戸長を改め、官選戸長を置く								
姫城外四村の役場を合併して弟子丸に置く								
県蚕業組合を組織する。コレラが流行する								
国分分署を、国分警察署に昇格する								
農事指導巡回教師制度きまる。大暴風雨で、大被害でる								
四月、市町村制実施され、郷を廃止し村に改める								
東襲山・清水・国分・東国分・敷根村ができる								
第一回町村会議員選挙が行われる。九月に青藍義塾設立される								
旧国道一〇号線が開通する。八月、コレラが流行する								
府県制、郡制が公布される								
一八九〇	一八八九	一八八五	一八八六	一八八四	一八八三	一八八二	一八八〇	西暦
七月、第一回衆議院選挙が行われる								中央の動き
十月、教育勅語が公布される								

明		治		時		代	
明治二五	一八九二	明治二七	一八九四	明治二九	一八九六	明治三〇	一八九七
明治三一	一八九八	明治三四	一九〇一	明治三六	一九〇三	明治三七	一九〇四
明治三九	一九〇六	明治四〇	一九〇七	共轢小を国分小に合併する 東国分村に農事指導巡回教師が配属される 県内に赤痢、天然痘、コレラが広がる 八月、日清戦争始まり、国分からも出征する 清水村日当平用水路竣工する 始良・嚙吟・桑原郡統合し始良郡となる 県道浜之市——東襲山線が開通する 二月より国分局電信業務を開始する。国分煙草専売所を開設 四月、始良郡の郡制が実施される 六月、鹿児島・国分（現隼人駅）間の鉄道が開通する 九月、現隼人・鹿児島間鉄道開通。検校橋災害復旧し落成する 小村新田島津家より譲られる 二月、日露戦争始まり、国分からも出征する 二月、私立精華学校が設立される 二月、東国分郵便局が開局する。国分出張所塩収納所が設立される 八月、敷根村に県種畜場が創設される			
一八九二	一八九四	一八九五	一八九九	一九〇〇	一九〇四	一九〇五	一九〇七
簡易小学校が尋常小学校となる	八月、日清戦争おこる	四月、下関講和条約結ばれる	四月、三国干渉で遼東半島を返す	二月、中学校令改正交付、実業学校令公布	三月、愛国婦人会が創設される	三月、直接国税一〇円以上の納税者に選挙権を与える	八月、小学校令を改定公布される

明治時代				大正				昭和			
年号	西暦	郷土の動き	西暦	中央の動き	西暦	中央の動き	西暦				
明治四一	一九〇八	国分地方より北・南米へ移住者多し。敷根天然ガス発見される		八月、国営種馬所牧園村に設立							
明治四二	一九〇九	十一月、鹿児島・八代間鉄道全線が開通する		十月、戊申詔書発布される							
明治四四	一九一一	十二月、国分電気株式会社が設立される（資本金五万円）	一九〇八								
大正二	一九一三	国分実科高等女学校が設立され、大正九年高等女学校となる		八月、第一次世界大戦がおこる							
大正三	一九一四	一月、桜島が大噴火、各地で大きな被害がでる	一九一四								
大正五	一九一六	実業補習学校が開設される	一九一八	八月シベリア出兵、米騒動おこる							
大正七	一九一八	鹿児島、都城間に乗合自動車が走る	一九一九	五月、直接国税三円以上の納税者に選挙権を与える							
		実業補習学校を中等公民学校に改称（各村に昭和二年までに開設される）		六月ベルサイユ講和条約結ばれる							
大正八	一九一九	私立国分幼稚園が開園される		一月、国際連盟が成立する							
大正一〇	一九二一	三月、大隅国分寺跡、国の史跡に指定される	一九二〇								
		六月、郡制廃止される。大正一五年には郡役所も廃止される									
大正一一	一九二二	福山・敷根・隼人間に乗合自動車が走る									
大正一二	一九二三	東国分川内小作人四〇人は小作料減額を要求して争議をおこす	一九二三	九月、関東大震災がおこる							
大正一三	一九二四	霧島・隼人間に乗合自動車走る	一九二四	七月、メートル法の使用を開始							
大正一四	一九二五	十二月、東襲山村小作人四一四人は小作料五割軽減を要求して争議をおこす。清水、国分でも小作争議がおこる	一九二五	三月、普通選挙法・治安維持法が制定される							
		五月、国分実成女学校が設立される									

昭和時代							大正時代
昭和四	昭和六	昭和七	昭和十	昭和一一	昭和一二	昭和一二	大正一五
一九二九	一九三一	一九三二	一九三五	一九三六	一九三七	一九三八	一九二六
四月、国分村が町制をしく 七月、青年訓練所が開設される 二月、国分町で全国農民組合鹿児島県連合第一回大会が開催 国分町図書館が発足する 四月、国分高等公民学校が開設される 十一月、健児団教育が始まる 十二月、隼人・都城間に鉄道が開通し、国分駅できる 清水・日当山間県道全通する 青年学校開設、青年訓練所と中等公民学校を解消して一本化 十月、隼人・国分・古江間に国鉄バスが開通する。 十月、鹿児島放送局開設。十一月国分・隼人地方で陸軍大演習 県下で初めて社会大衆党の富吉榮二が、革新から当選する 三月国防婦人会できる。十月国民精神総動員実行委員会が発足 東国分村の上井井堰が竣工する 三月、本県からも満蒙開拓青少年義勇軍第一陣が発発する 三月、市町村に銃後奉公会が設置される 七月、全日本防空協会県支部が発足する							敷根簡易水道が開設される
一九二六	一九二六	一九二六	一九二六	一九二六	一九二六	一九二六	一九二六
四月、陸軍現役将校学校配属令を公布する 七月、ラジオ放送が始まる 四月、幼稚園令が公布される 全国に青年訓練所が開設される 九月、満州事変がおこる 五、一五事件がおこる 色刷り国定読本の使用を開始する 青年学校令公布（実業補習学校・青年訓練所廃止） 二・二六事件がおこる 七月、日中戦争がおこる 四月、国民総動員法が公布される 四月、青年学校を義務制にする 五月、「青少年学徒二賜リタル勅語」を公布する							

昭 和 時 代					
昭和二〇	昭和一九	昭和一八	昭和一七	昭和一五	年 号
一九四五	一九四四	一九四三	一七四二	一九四〇	西 暦
三月、県内各学校に海洋少年団設立が指示される 十一月、各地で紀元二六〇〇年奉祝式典が行われる 国分海軍航空隊飛行場の建設が始まり、小村（広瀬）・福島・松木・野口集落の一部が強制移転させられる 一月、学校・婦人団体で竹槍訓練が始まる 八月、県男子学徒報国隊、長崎方面その他に動員が始まる 十二月、農会・畜産・茶業・養蚕の各組合が合併し農業会となる 一月、女子学徒報国隊、長崎方面へ動員が始まる 二月、各戸に防空壕築造を命ずる 四月、県下に食糧増産隊が発足する 八月、国分海軍航空隊が発足する 十月、県緊急防空強化要綱を決める 三月以降、国分海軍航空隊より、特攻機が出撃する 三月以降、県内各地、アメリカ軍の空襲が激しくなる 四月、県下国民学校、四月一六日から月末まで低学年の臨時休校を決定する 四月十六・七・八日、米空軍国分地方空襲、飛行場周辺大被害でる。被災者は山手などに避難し、防空壕生活を始め					郷 土 の 動 き
一九四五	一九四四	一九四三	一九四二	一九四〇	西 暦
五月、戦時教育令公布、学徒動員強化される 三月、国民勤労動員令公布される 一月、最高戦争指導会議、本土決戦等の戦争方針を決定する 十月、十八歳以上を兵役に編入 八月、家庭用砂糖配給停止となる 二月、中学生の卒業一年短縮 一月、学徒勤労令が公布される 十二月、徴兵年齢を一年短縮する 十二月、第一回学徒兵が出陣する 六月、男子学徒、七月、女子学徒の動員を決定する 二月、衣料配給切符制となる 二月、大日本婦人会が結成される 十二月、太平洋戦争が始まる 四月、国民学校が発足し、義務教育八か年となる 十月、大政翼賛会ができる					中 央 の 動 き

昭和時代
八月十五日、戦争が終わる。
六月、国民義勇兵役法公布される 六月、国民戦場化具体措施をとる 八月、広島・長崎に原爆投下される 八月、ポツダム宣言受諾、太平洋戦争が終わる

参考文献

第一編

『始良カルデラ入戸火砕流の流動・堆積機構』『東京教育大学地理学研報告』XVI一二七〜一六七頁 横山勝三
一九七二年

『始良カルデラと入戸火砕流』『月刊地球』五 八三〜九二頁 荒牧重雄 一九八三年

『始良Tn火山灰(AT)噴火が生態系に及ぼした影響』『第四紀研究』三〇 四一九〜四二六頁 辻誠一郎・小杉正人 一九九一年

『鹿児島県災異誌』鹿児島県・鹿児島地方気象台 一九六七年

『鹿児島県水産振興課』『資料』一九九四年

『鹿児島県統計年鑑』昭和五八〜平成五年度 鹿児島県

『かごしま自然ガイド淡水産のエビとカニ』西日本新聞社 一九九四年

『鹿児島県地質図』鹿児島県 一九九〇年

『鹿児島湾北西岸地域の第四系の再検討』『団地研專報』三三 二〇七〜二二四頁 長谷義隆・山脇真二・早坂康隆 昭和六十二年

『鹿児島湾北岸におけるマグマ水蒸気爆発のこれに影響を与えた縄文海進』『地学雑誌』九五 二四〜四三頁 森脇 広・町田 洋・初見祐一・松島義章 一九八六年

『鹿児島県湾周辺地域自然保護基本調査』昭和四十七年度調査 鹿児島県 一九七三年

『火山灰アトラス(日本列島とその周辺)』二七頁 町田 洋・新井房夫 東京大学出版会 一九九二年

桜島火山の形成史と火砕流、「火山噴火に伴う乾燥粉体流(火砕流等)」の特質と災害」所収 小林 一九八六年

『霧島火山、新砂防・四四巻』四号 鹿児島県土木部砂防課 一九九一年

『九州地方における温泉の地質学研究(第一五報)——鹿児島地溝内の湧出する温泉、特に温泉貯溜体について』『鹿大理学部紀要』(地学・生物)二 八五〜一〇一頁 露木利貞 一九六九年

「九州における大規模火砕流の噴火とその堆積物」『地
形』八 二四九～二六七頁 横山勝三 一九八七年

『国分市地域防災計画』国分市 一九八八年

五万分之一海底地形図「鹿児島湾北部」海上保安庁
一九九〇年

「桜島火山の地質」『地質学雑誌』八四 三〇九～三一
六頁 福山裕之 昭和五三年

『市報こくぶ』一九五五号・二八〇号・号外（災害特集
号）一九九三年

『昭和四二年度災害の記録』鹿児島県 一九六七年

『震災予防調査会報告』九二 今村 一九二〇年

『調べよう鹿児島島の自然』（第五巻）鹿児島県立博物館
一九九二年

「末吉地域の地質」『地域地質研究報告』（五万分之一
地質図幅）一一一頁 斉藤眞・佐藤善男・横山勝三

地質調査所 一九九四年

『日本の重要な淡水魚類』（南九州・沖縄版）環境庁編
一九八二年

『平成五年度鹿児島豪雨災害の記録』鹿児島県 一九
九五年

「The late Quaternary tephra layers from the ca-
ledra volcanoes in and around Kagoshima Bay,

southern Kyushu, Japan.」

『Geog. Rept. Tokyo Metropol. Univ.』23 49～122
Nagaoka, S. 1998.

第二編

『石の鹿児島』平田芳信 南日本新聞開発センター
平成七年

『大隅国分寺と康治元年銘石層塔』小田富士雄 一九
八八年

『大隅・薩摩 高城国府』藤井重壽 創現社 昭和四
十六年

『鹿児島県史 第一巻』鹿児島県 昭和十四年

『鹿児島県の歴史』原口虎雄 山川出版社 昭和四十
八年

『蒲生郷土誌』蒲生郷土誌編纂委員会 平成三年

『九州古瓦図録』九州歴史資料館 昭和五十六年

『九州史学』七〇号 田中健二 一九八〇年

季刊『考古学』第四二号「須恵器の編年とその時

代」一九九三年

『九州の道・いま・むかし』三原浩良 葦書房 一九

九四年

『大隅国府と日向国島津駅』小園公雄 平成四年

『熊襲と隼人』井上辰雄 教育社 昭和五十四年

『熊襲・隼人の原像』北郷泰道 吉川弘文館 平成六
年

『古代クマソ王国』松元十丸 大陸書房 昭和四十六
年

『古代を考える 古代の道路』木下良 吉川弘文館
平成八年

『古代の道と国』丸茂武重 六興出版 昭和六十一年

『古代の役所』山中敏史・佐藤興治 岩波書店 一九
八五年

『古墳時代の研究』土師器と須恵器 雄山閣 一九
九三年

『史料による日本の歩み・古代編』児玉幸多他 昭和
六十一年

『続日本紀 一・二・三・四』青木一夫他三人 岩波
書店 一九八九〜九五年

『図解・考古学辞典』水野清一・小林行雄 東京創元
社 昭和四十九年

『土器・技術の変遷と美』福岡市立歴史資料館 一九
七九年

『都府楼 第十一号』森弘子・梅野祥子・大隅和子
『梅花の宴』平成三年

『特別展・国分寺』奈良国立博物館 昭和五十五年

『日本の考古学・その歩みと成果』東京国立博物館
昭和六十三年

『日本の古代遺跡 三八』河口貞徳 「鹿児島」保育社
昭和六十三年

『日本の美術 八』「国分寺」三輪嘉六 昭和五十五年

『日本の美術 十一』「古代の瓦」稲垣晋也 昭和四十
六年

『日本の美術 四五』「石造美術」小野勝年 至文堂
昭和四十五年

『日本の美術 六五』「上代の寺院建築」鈴木嘉吉 至
文堂 昭和四十六年

『日本の美術 十』「塔」石田茂作 至文堂 昭和四十
七年

『隼人・古墳時代の南九州と近畿』 檀原考古学研究所
付属図書館 一九九二年

『隼人の研究』 中村明蔵 丸山学芸図書 平成五年

『隼人の考古学』 上村俊雄 ニュー・サイエンス社

昭和五十九年

『仏教文化の伝来』 鹿児島県歴史資料センター 平成

二年

『埋蔵文化財発掘調査報告書・鍛冶屋馬場遺跡』 国分

市教育委員会 一九八九年

『牧園町郷土誌』 牧園町郷土誌編纂委員会 平成三年

『南九州古代ロマン』 中村明蔵 丸山学芸図書 平成

三年

『南九州の墳墓』 鹿児島県歴史史料センター 昭和六

十三年

第四編

『始良地方の研究 第三巻』 松山雅雄 鹿児島女子師

範学校 昭和十年

『一外交官の見た明治維新』 アーネスト・サトウ

『沖縄県史』 一九八九年復刻刊 図書刊行会

『沖縄の歴史』 宮城栄昌 日本放送協会

『沖縄の歴史と文化』 外間守善 中公新書

『鹿児島県史・第一巻』 鹿児島県 昭和十四年

『鹿児島県史・第二巻』 鹿児島県 昭和十五年

『鹿児島県史料 旧記雑録 後編四』 鹿児島県

『鹿児島県農地改革史』 鹿児島県 昭和五十年

『鹿児島県のおいたち』 面高正俊 鹿児島県中学校校

会科教育研究会 一九八三年

『鹿児島県の歴史』 原口虎雄 山川出版社 一九七三

年

『鹿児島の歴史』 鹿児島県社会科教育研究会高等学校

歴史部会編 大和学芸図書 昭和五十五年

『鹿児島県の歴史散歩』 鹿児島県高等学校歴史部会編

山川出版社 一九九二年

『鹿児島県地下資源概観』 鹿児島県

『鹿児島県林業史 特別史料』 鹿児島県林業史編纂協

議会 平成五年

『鹿児島大百科事典』 南日本新聞社 昭和五十六年

『鹿児島百年』 (上) 南日本新聞社

『郷土のくらし』 南日本新聞 (一九五六年五月八日付)

『郷土史研究会誌 三号』「古碑文集録」吉永吉夫 集

人町郷土史研究会 昭和三十四年

『近世薩琉関係史の研究』喜舎場一隆 図書刊行会

『国分商工会ニュース 国分いまむかし 国分たばこ』

『国分の史跡』国分小学校 昭和十五年

『国分の歴史散歩』本田潔 国分市民報に連載

『薩藩海軍史』公爵島津家編纂所 昭和三年

『薩摩史談集』重野安繹・小牧昌業 昭和四十三年

『敷根火薬製造所跡発掘調査報告書』鹿児島県立国分

高等学校郷土研究クラブ 一九八九年

『島津歴代略記』島津顕彰会 昭和六十年

『庄内軍記』安藤緑江 庄内軍記刊行会 昭和七年

『調所広郷』芳即正 吉川弘文館 昭和六十二年

『西藩野史』得能通昭

『大正十三年県下贈位十六士小伝』鹿児島県贈位奉告

祭典委員会（島津久通の林業功績が掲載されている）

『大日本農政類編 卷之十』「山林」農商務省農務局纂

訂 明治三十五年（慶応の末年までの農政の事実を類

別に編纂したもの）

『たばこおもしろカタログ図鑑』講談社

『財部郷土誌』財部郷土誌編纂委員会

『鉄砲史研究 一七七号・一七九号・一八一号・二二

四号』鹿児島県敷根火薬製造所「川越重昌 一九八

六・一九九〇年

『日本史』井上光貞他 山川出版社 昭和六十二年

『日本宗教総覧』山折哲雄 新人物往来社 平成四年

『日本史用語辞典』柏書房 一九九二年

『日本史分類年表』東京書籍 一九八九年

『幕末の薩摩』原口虎雄 中公新書 昭和四十一年

『隼人町の歴史』隼人町教育委員会 平成三年

『広瀬のうつりかわり 塩田』広瀬公民館

『幕末外交談』田辺太一 東洋文庫

『万有百科大辞典 第五卷日本史』「江戸時代」小学

館 昭和四十八年

『明治以前日本土木史』(社)土木学会編(社)土木学会 昭

和十一年

『琉球征伐日記』市来孫兵衛 鹿児島県立図書館蔵

第五編

『鹿児島県史 第三卷』鹿児島県

『鹿児島県史 第四卷』鹿児島県 昭和十八年

『鹿児島県史 別巻』鹿児島県 昭和十八年

『鹿児島県民の百年』芳即正編 著作社

『鹿児島県の歴史』原口虎雄 山川出版社

『鹿児島の歴史』鹿児島県社会科教育研究会・鹿児島

県高等学校歴史部会 昭和五十五年

『鹿児島と維新』鹿児島県明治百年記念事業委員会

昭和四十二年

『鹿児島農地改革史』鹿児島県 昭和五十年

『鹿児島百年』『幕末編』南日本新聞社編 春苑堂書店

『解題 日本史』永原慶二 学生社

『鹿児島日報』昭和十九年八月二十六日

『鹿児島県史 第二卷』鹿児島県 昭和十六年

『鹿児島県史 第五卷』鹿児島県 昭和四十二年

『鹿児島県農事調査』原口虎雄編纂 昭和五十五年

『鹿児島県の林業』鹿児島県 昭和十年

『郷土史』上野繁 昭和十年

『国分郷土誌』国分町 昭和十年

『清水村郷土誌資料 第一卷』

『清水村々是』明治三十八年

『新編日本史』原書房（高校用教科書）

『戦史 本土決戦準備(2)』防衛庁 防衛研究所戦史室

昭和四十七年

『大正三年桜島噴火記事』九州鉄道管理局 大正三年

『町勢要覧』国分町 大正十五年

『地租改正』日本歴史学会 吉川弘文館 昭和四十三年

年

『日本史』井上光貞他 山川出版社 昭和六十二年

『日本馬政史』定刻競馬協会 昭和三年

『日本林業発達史』（上巻）林業発達史調査会 伏見書

店 昭和三十五年

『東国分村郷土資料』東国分村教育委員会 昭和五年

『東襲山村誌』東襲山村 昭和九年

『ブラジル移民史五十年』入江虎次 昭和三十三年

『丸』潮書房 昭和五十六年

『林業政策』島田錦蔵 朝倉書房 昭和二十七年

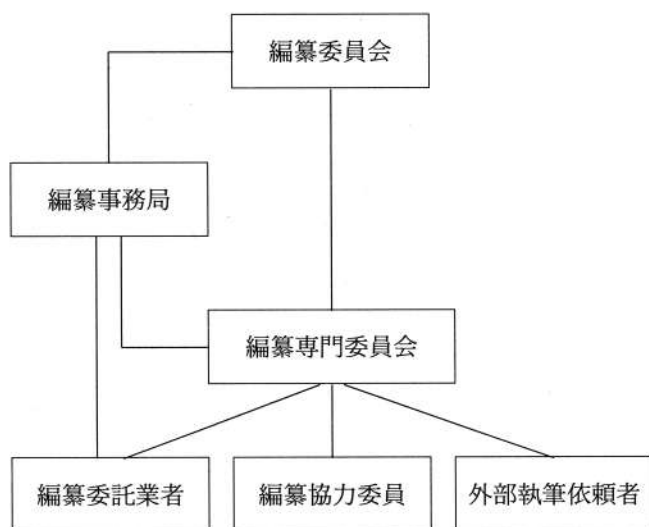
あとがき

上巻・資料編の編集を終えて

国分市は昭和三十年（一九五五）市制施行以後、平成七年（一九九五）で四十周年を迎えた。これを記念する事業の一つとして、新郷土誌を発刊することが企画された。すでに本市は昭和三十五年と四十八年に郷土誌を刊行しており、いずれも当時の先輩学兄による価値高い内容を持った労作である。しかし四十八年以後二十二年を経過し、この間において、考古学上の新発見や、史学の新視点での研究の深まりもみられ、また市の変貌にも著しいものがあり、前記の企画となった次第である。

平成五年二月に郷土誌編纂委員会、編纂専門委員会が発足し、編纂事務局を市立図書館三階に設けた。当初は現代の視点に立つて前郷土誌を部分改訂するという方針であったが、つぶさに検討を加えていくうちに全面改訂の声が高まり、上巻・下巻・資料編の三分冊からなる新郷土誌を発刊することになった。

編纂執筆事業を推進するための組織を下図のように定



郷土誌編纂組織図

めた。

次いで左記の基本方針や、編纂専門委員の執筆分野を定めた。

● 全面改訂の方向で編集するが、既刊の郷土誌の内容をできるだけ活用する。

● 読者が理解しやすい文章を心がけ、市民が利用しやすく、また学術的研究にも耐えうるものとする。

● 公正な史実に基づき、偏らない内容のものを客観的視点で記述する。

● できるだけ広く資料を収集する。

● 用字・用語には細心の注意を払い、統一を図る。

特に上巻・資料編の執筆、古文書の解説等にあたっては、次の事項についてその道における県下の碩学の先生方にご依頼した。先生方は多忙な中を時間を割いて玉稿をお寄せいただき、感謝のほかはない。(敬称略)

総 監 修 五味 克夫 (鹿児島女子大学)

地形・地質 成尾 英仁 (県立博物館)

自然災害 下川 悦郎 (鹿児島大学農学部)

植 物 沢津川 稔 (植物研究家)

鳥 類 江口 玄 (江口整形外科院長)

蝶 トンボ 若松 昭伸 (国分市役所)

水中生物 江平 憲治 (錦江湾高校)

古代・発掘 鈴木 広志 (鹿児島大学水産学部)

発掘(国分) 新東 晃一 (県埋蔵文化センター)

鈴木 順一 (国分市教育委員会)

西南戦争・明治初年行政 平田 信芳 (郷土史家)

石 塔 類 松田 誠（中種子高校）

イラスト 靄 勝男（画家）

古文書解読 宮下 満郎（維新ふるさと館）

同 江平 望（郷土史家）

同 前床 重治（鹿児島中央高校）

なお、総監修の五味先生には、素人集団である私共の原稿を丹念に監修していただき、含蓄のあるご指導を賜った。滋味あふれる先生のご指導に対し、厚くお礼を申し上げる次第である。



上巻編集中に私共は三人の仲間を失った。

本田 潔 編集協力委員（平成七年一〇月逝去）

東 勝美 編集専門委員（平成八年三月逝去）

池田 文哉 編集協力委員（平成八年六月逝去）

さらに肥後芳尚編集専門委員も平成八年三月に辞任された。

資料の不足・散逸・入手困難、欠員による執筆量の増加、締め切り時間に追われての推敲など、力不足を嘆じつつもどうにか上巻・資料編を上梓する運びとなった。これまでの市ご当局や関係機関のご指導、市民の方々のご協力に深く感謝申し上げてあとかきの稿を閉じることにする。なお全般的な編集後記は下巻で述べたい。

編集専門委員会（甲斐）

国分郷土誌 上巻

平成九年三月三十一日発行

編集 国分郷土誌編纂委員会

発行 国分市

〒八九九―四三

国分市中央三丁目四十五番一号

電話（〇九九五）四五―五一―（代表）

印刷 第一法規出版株式会社

〒一〇七

東京都港区南青山二―一―一七

（九州支社）

〒八一〇

福岡市中央区大手門三―五―一

887	878	780	651	641	631	584	580	541	527	500	498	497	488	454	450	242	216	212	187	174	171	169	81	68	口 檢	頁
17行	下段19行	下段5行	下段2行	下段15行	下段15行	下段7行	下段14行	下段6行	上段18行	下段17行	上段13行	下段9行	下段10行	下段22行	下段15行	上段19行	上段14行	写真5-5	上段16行	上段2行	下段9行	上段16行	上段11行	下段12行	古地図の年号	
青華学校	青華学校	島田喜右衛門	(一九三二)	(一九〇四)	砲台	軍軍	郷士年寄	三〇〇〇石	大持神社	富隅城	(一九六三)	(一八六四)	年行司書下各字町人	(贈桑原村)	需要街道	(第二編第三章二節)	(一九〇三)	写真の上下が逆	六八二年	二対	二対	園分市下井	マヤツリグナ科	四方十萬軒	(一八六八)	
精華学校	精華学校	島田喜右衛門	(一九三二)	(一九〇五)	砲台	軍軍	郷士年寄	三〇〇〇石	大八持神社	富隅城	(一九六三)	(一八六三)	年行司書下各字町人	(贈桑原郡)	需要街道	(資料編)	(一九〇二)	写真の上下入れかえ	六八一年	一対	一対	園分市上井	カヤツリグナ科	四方十萬軒	(一九〇八)	正



ハタバコ



